

ひょうごの遺跡

平成17年
10月7日発行
57号

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2-1-5 TEL 078(531)7011 FAX 078(531)7014

ホームページアドレス <http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

掘り出された動物たち

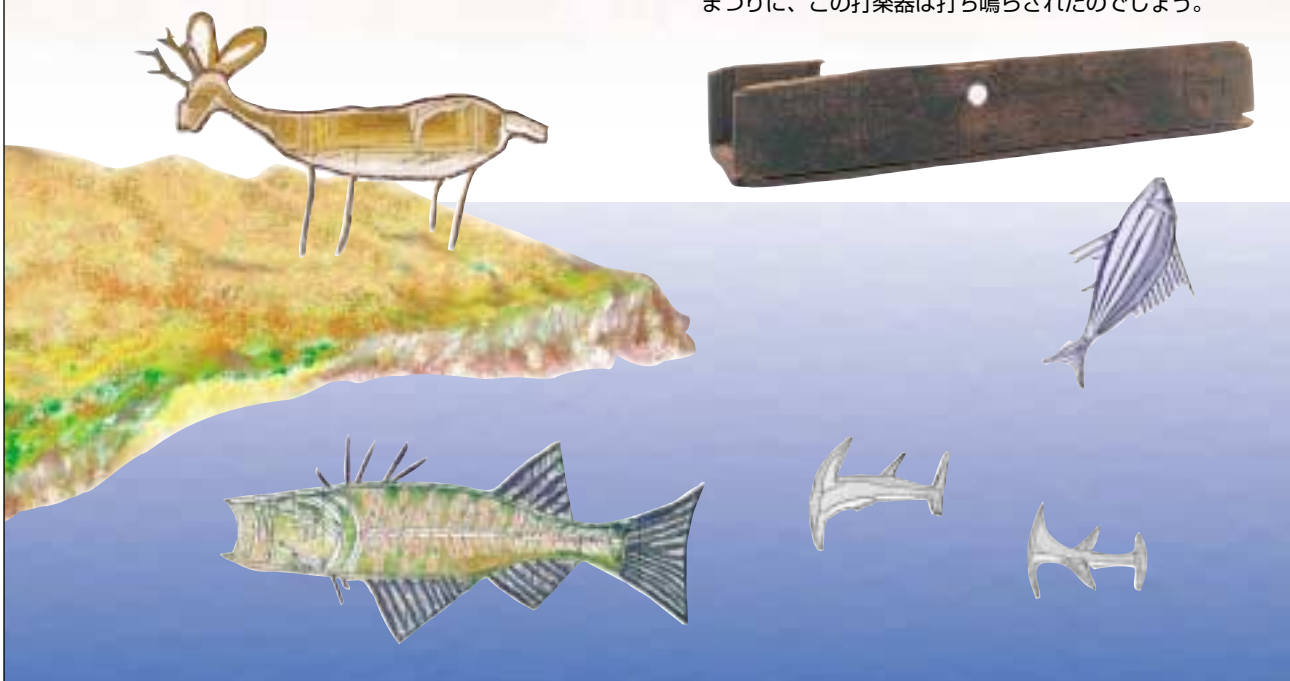
遺跡から出土した土器、埴輪、木器、金属器の中にいろいろな動物の姿を目にすることがあります。簡素ですが、ユーモラスに特徴がとらえられていて、当時の人々にとって身近な動物だったことが分かります。龍などの空想の動物は信仰の対象として描かれたのでしょう。

今号では、弥生時代から近代に至るまで、土の中から発見された出土品にみられる動物たちを紹介します。…… **「むかしの動物たちに会いに、タイムスリップ!!」**

～弥生時代…秋を迎えた但馬です～

海では、産卵を間近にむかえ、体を赤く染めたサケが大きな口を開けて、母なる円山川を目指しています。それを追うかのようにシュモクザメが迫り、沖合では、カツオが波間から勢いよく跳ねています。山にはシカもたくさんいて、豊かな秋の光景です。

弥生時代の打楽器とされる箱形木製品（豊岡市出石町 袴狭遺跡）に描かれた線刻画は、山海の幸に恵まれた但馬の情景を物語っています。自然の恵みに感謝して収穫を祝うまつりに、この打楽器は打ち鳴らされたのでしょう。



土器に表現された動物たち

弥生時代の銅鐸の絵画にはシカやイノシシ、水鳥・スッポン・カエル・魚など、野山や田んぼで身近に見られるいろいろな動物が描かれています。しかし、同じ時代の土器に描かれているのは、不思議なことに圧倒的にシカが多いようです。角を表現したものもあれば、角の無いシカもあります。絵が描かれるのは、まつりに使う壺や器台が多いようです。

もう少し時代が下り、弥生時代後期になると、想像上の生物である「龍」らしい姿が描かれた甕もあります（玉津田中遺跡）。この時代には、土器に絵が描かれることは少なくなり、記号のような模様がよく見られます。

古墳時代、朝鮮半島から伝わった技術で焼かれた須恵器の中には、動物・人物の小像が飾られた装飾付須恵器があります。勝手野古墳から出土した装飾付須恵器には、イノシシ、牡シカ、人物が乗った馬が表現されていました。他に狩の場面を表した須恵器で犬が表現されている例もあります。貴船神社遺跡から出土した新羅陶器の把手にも、人物もしくはサルの顔面が表現されています。どちらかという、こうした立体的な表現は外来的な要素が強いようです。朝鮮半島や中国にはもっと様々な種類の動物が立体的に表現された土器があります。



かいいたに
貝谷遺跡（三木市）シカ



おおがち
大垣内遺跡（西脇市）シカ



かつての
勝手野古墳群（小野市）動物・人物の小像



きぶね
貴船神社遺跡（淡路市）サル？

馬とまつり

私たちの祖先が祭祀（まつり）に使った動物は、縄文時代のイノシシと弥生時代のシカでした。そして、古墳時代になるとウマが採用されてきます。考古学の資料によると、日本列島に馬が登場するのはそれほど古い時代ではありません。確実なものでは5世紀、その普及は6世紀とされています。

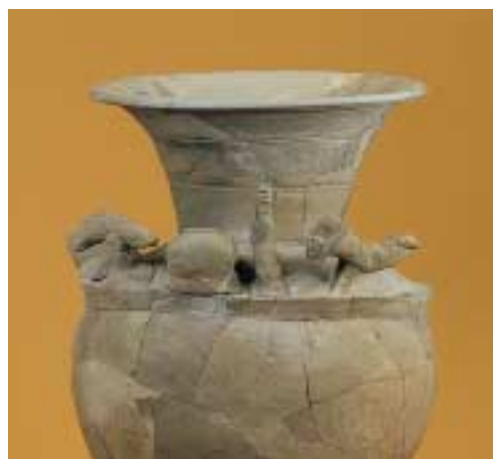
この時代に中国・朝鮮半島から小型・中型馬が伝わり、馬の重要性・貴重性から神や貴人の乗り物とする考え方が生まれ、まつり・儀礼に使用したようです。

土製馬形・木製馬形

土製馬形と言えば古墳に置かれた馬形埴輪を想い浮かべる方も多いでしょうが、今回は古墳時代の小さな土製馬形と装飾（馬）付須恵器、そして奈良・平安時代の木製馬形を紹介します。

田井野遺跡（三木市）出土品

たてがみをつまみ上げ、目と鼻は刺突で表現します。馬具の類は粘土紐を貼り付けたり、別粘土で作りつけた丁寧な作りの土製馬形です。住居跡から出土したもので、年代は古墳時代後期（6世紀末頃）です。



箱塚4号墳（篠山市）出土品

広口壺の肩部に馬と人物像、その他に猪・小壺をのせています。馬具類は粘土紐を貼り付け、たてがみはつまみ上げ、目と鼻を刺突で表現した可愛い馬です。馬上には、人物が乗っていたように見えます。年代は6世紀中頃です。

土製馬形は水神祭祀もしくは祓の儀礼に、装飾付須恵器は亡くなった人のためのまつりに使用したものです。

袴狭遺跡群（豊岡市）出土品

扁平な横長板材の上辺と下辺を切り欠き、馬の側面の全身像を表現したものです。足は側面に2対の切り込みを入れ、薄い板を差し込んだようです。鞍を作り出した飾馬と持たない裸馬があり、裸馬が古くて飾馬が新しい型式です。

木製人形とセットで祓の儀礼に用い、人形を運ぶための乗り物と考えられます。



鏡の中の動物

鏡（青銅鏡）は弥生時代中期に中国からもたらされ、その後は国内でも生産されるようになりました。なかでも平安時代後期から江戸時代までの時期に作られた鏡を和鏡と呼びます。

和鏡の裏面に描かれた文様は松、梅、萩、菊など四季折々の植物や鶴、尾長鶏（オナガドリ）、鵲（カササギ）、雀などの鳥類、蝶、蟋蟀（コオロギ）などの昆虫を写実的に描いており、自然の風物を愛する日本人好みに変化しています。



瑞花鴛鴦鏡（鎌倉時代）たりまえだ 多利前田遺跡（丹波市）
2羽の鴛鴦（おしどり）が描かれています。



荒磯文双禽鏡（鎌倉時代）しゅうくはら 宿原寺ノ下遺跡（三木市）
2羽の水鳥が描かれています。



山吹蝶鳥文鏡（平安時代末～鎌倉時代初頭）かみいたい 上板井経塚（篠山市）
雀と蝶々が表現されています。



松鶴鏡（江戸時代）ひょうごつ 兵庫津遺跡（神戸市）
亀を鈕にして、となりに鶴が表現されています。

兎の水滴



月が美しい季節になりました。日本では月の表面の模様を兎が餅つきをしている姿に見立てて来ました。そこで兎にちなんだ逸品を紹介しましょう。

この兎は、養父市の場市遺跡の庭園跡より出土しました。中は空になっており、背中の穴の部分から水を入れ、口の部分から硯に水を注ぐ水滴という文房具です。正面から見ると愛嬌がある表情をしています。

動物を模した器や玩具



江戸時代の遺跡からは、動物が描かれた碗や皿などの日常品の他、動物をかたどった土人形などが出土しています。明石城武家屋敷跡（明石市）から出土した皿には、鯉と思われる二匹の魚がいまにも飛び跳ねるように描かれており、牛の土人形や金魚の置物なども出土しています。また、伊丹郷町・有岡城跡（伊丹市）からは、切り株に腰を掛ける猿とユーモラスな表情の手長猿の2匹の土人形が出土しています。土人形は、この時代の子供たちのおもちゃのようなものであったと考えられています。

明治時代から大正時代に製作されたやきものの失敗品を捨てた跡を調査した珉平焼窯跡（南あわじ市）からは、背中に多くの穴が開いた蛙や鯉が出土しました。これは、花を挿し込むための花留で、当時、海外へ輸出されたものです。また、頭頂部にも多くの穴が開いた中空の雀が出土しており、食卓に置かれた塩や胡椒などの調味料入れと思われます。このほか、エッグスタンドや置物、躍動する龍が描かれた皿なども出土しており、西洋の影響を受けた近代の新しい形や用途のものが多くみられます。



置物（珉平焼窯跡/南あわじ市）



2匹の猿（伊丹郷町・有岡城跡/伊丹市）と
牛の土人形（明石城武家屋敷跡/明石市）



花留（珉平焼窯跡/南あわじ市）



調味料入れ・エッグスタンド（珉平焼窯跡/南あわじ市）

骨から見た古代の食料事情

遺跡を調査していると、昔の人が残した動物の骨が見つかることがあります。多くは昔の人が食料として食べた残りかすのようですが、時には小刀の柄に加工されたシカの角や、穴を開けて首飾りにしたサメの骨のように、骨角器として利用したものや、毛皮を利用するためのテンなどの骨、飼育していたウマ・ウシなどの骨もあります。

縄文時代

淡路島の縄文時代の遺跡、^{つくだ}佃遺跡からは、ニホンジカ・イノシシ・タイ・スズキの骨の他に、サメ・イルカ・クジラの骨が出土しました。イノシシやシカ、魚類は貝類と並んでむかしから日本人の主要タンパク源であり、イルカやクジラも捕まえて食料としていました。



縄文土器と動物の骨

弥生時代



サメの骨のネックレス

弥生時代の^{たまつたなか}玉津田中遺跡でも、イノシシやニホンジカ、マダイなどの骨が出土しています。調理のため、火にあぶられた痕跡が残ったものや、長時間煮られて変質したと思われるもの、肉をそぎ落とした痕跡が残るものがありました。その中にはイヌ・カメの骨が含まれ、イヌやカメもおいしく賞味していたようです。

中世～近世

中世から近世の遺跡である兵庫津遺跡では、タイ・ハモ・スズキ・アワビ・サザエ・アカニシなど寿司屋の高級ネタが出土しています。タイはおそらく1m近い大物で、今なら魚拓サイズでしょう。アワビも大きなものです。これらは富裕な人たちが食べたものと考えられます。



魚の骨と貝殻



イヌの骨

江戸時代

江戸時代でも侍はこっそりとイヌを食べていました。明石城の武家屋敷跡からは、解体痕や調理痕が残るイヌの骨がたくさん見つかります。ネコの骨も見つかりましたが、これには解体・調理痕はありませんでした。ネコはおいしくないのか、あるいはたたりが怖かったのかもしれない。

考古楽祭の歩み

平成4・5年の頃、新幹線の車内に「〇〇製作所は、何をセイサクしているんだろう」という広告がありました。このキャッチコピーからヒントを得て「魚住分館は、何をやっているんだろう」と企画したのが、「埋蔵文化財収蔵庫展」です。

埋蔵文化財調査事務所は、魚住分館（明石市魚住町清水）に、発掘調査を記録した図面や写真、出土した遺物を大量に保管・管理するとともに、遺跡から出土した木製遺物の保存処理を行っています。

この収蔵庫には、学術的に大変貴重な遺物が多数あります。これらの遺物は、他の資料館、博物館に貸し出し、展示をしてもらうばかりで、一般の方々に直接見ていただくことはありませんでした。また、魚住分館の存在自体が、余り知られず、住民の方々には「何をやっているんだろう」と言われていました。

そこで、平成14年11月2日～8日、「考古楽祭－埋蔵文化財収蔵庫展－」のタイトルで分館の仕事や作業内容を県民の方々に公開し、保管している記録図面・遺物・遺構（剥ぎ取り、切り取り遺構等）の展示と、勾玉作り・火起こし・拓本採取など古代体験を取り入れた企画展を開催いたしました。

博物館のような展示ケースに納めない、いわゆる「倉庫展」として、**1. 保管遺物のうち、形が大きすぎて展示されない遺物、例えば一抱えもある壺や甕など約30点、また非常に重い弥生時代の人骨が埋葬された木棺や縄文時代の**

ドングリ貯蔵穴の切り取りなど約20点、2. 金属製品・木製品の保管状況・保存処理施設、3. 発掘調査記録図面等（測量図面・実測図面・空中写真）を公開しました。

展示の案内・解説、整理作業の実演、古代体験の指導等については、魚住分館に勤務する職員と考古楽者約10名が担当しました。父兄に伴われた児童や近在の方々、753名が来館されました。

第2回目は、兵庫県立考古博物館（仮称）が平成19年度にオープンすることが決定したのを受け、そのイベントとして、「考古楽祭－木の遺物を守れ－」（平成16年11月6日～8日）を企画しました。

前回同様、日常業務を公開する一方、特に木製品の保存処理作業とその成果を「知る」「調べる」「読む」「守る」「残す」の5つに分け、年輪年代の測定、ポリエチレン・グリコールで処理した木製品の引き上げ、樹種

同定のための切片取りと顕微鏡観察といった体験を通じて理解を図りました。

古代体験として、勾玉作り、火起こし、拓本採取、ろう鐸づくり、発掘模擬体験、遺物発掘（釣り）あそび、縄文クッキーを食べる等のメニューを増やして開催しました。小学生・高校生、歴史好き熟年者も多く、497名が見学に見えました。

「収蔵庫展」は、私たちの働く職場を、遺跡から発掘された膨大な遺物とともに、テーマを定めて展示・公開することによって、兵庫県の歴史や文化の理解に役立てればと考えています。



第3回 埋蔵文化財収蔵庫展

考古祭

小さな
小さな

どうぶつ園



土の中から出てきたカワイイ動物達に会いに行こう！

古代体験もあるよ
(土・日のみ)



期間 平成17年10月27日(木)～11月2日(水)
午前10時～午後3時

場所 魚住分館 TEL 078-947-4131
明石市魚住町清水字立合池の下630-1

編 集 後 記

今回は動物を対象にして特集を組んでみました。動物が単なる捕食対象から、精神文化の発達とともに、神の使者や呪術対象となり、やがて芸術・玩具・愛玩物へと時代の変遷とともに変わっていく姿がおわかりになりましたでしょうか。最近のペットブームは動物が家族の一員や友達的な役割を果たしているようですが、人間と動物のもっとも進んだ関係でしょうか？ (S.M)

